

臨床,研究,人材育成, 地域医療をつなぐ



安日一郎先生

独立行政法人国立病院機構長崎医療センター 産婦人科



伊藤雄二先生

地域医療振興協会 総合診療産婦人科養成センター センター長
市立恵那病院 副管理者・産婦人科

安日一郎(やすひ いちろう)先生 プロフィール

1981年に鹿児島大学医学部を卒業、長崎大学医学部産科婦人科学教室に入局。その後、国立病院長崎医療センターに赴任する。1995年から2年間にわたり米国ブラウン大学産婦人科母体胎児部門で研鑽を積む。帰国後、長崎大学産婦人科講師、周産期医療部助教授を経て、2002年より再び長崎医療センターに赴任、2005年から産婦人科部長、2007年から総合周産期母子医療センター長を兼任。現在は非常勤顧問として勤務している。

伊藤雄二(いとう ゆうじ)先生 プロフィール

1985年に自治医科大学医学部を卒業後、長崎県の対馬の周産期医療の充実のために産婦人科の開設に参画。1995年からは、佐賀大学医学産婦人科講座の助手(現在の助教)として周産期医療の研鑽を積んだ。2002年から西吾妻福祉病院 副院長、2009年には同院の病院長として勤務。2015年に地域医療振興協会 総合診療産婦人科養成センターを開設し、分娩管理を含む産婦人科医療に対応できる総合診療医の育成に励む傍ら、市立恵那病院に産婦人科部長として赴任。2017年からは市立恵那病院にてお産の受け入れを開始し、地域の産婦人科医療に貢献している。

五つ子誕生のニュースが、 産科を志すきっかけに

伊藤雄二(聞き手) 本日は、国立病院機構長崎医療センター産婦人科の元部長で、現在は顧問を務

めておられる安日一郎先生にお話を伺います。

安日先生は1981年に鹿児島大学を卒業し、長崎大学医学部産科婦人科学教室に入局されました。その後、長崎医療センターに赴任された際、初期研修医だった私をご指導くださったことが、

先生との最初のご縁です。1995年から1997年には、米国ロードアイランド州のブラウン大学産婦人科母体胎児部門に留学され、妊娠糖尿病研究の第一人者であるCoustan先生、Carpenter先生のもとで学ばれました。帰国後は長崎大学産婦人科の講師、周産期医療部の助教授を経て、2002年に再び長崎医療センターに勤務され、2005年から産婦人科部長、2007年から総合周産期母子医療センター長を兼任されました。日本産科婦人科学会専門医、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医として診療に当たり、日本糖尿病・妊娠学会では常務理事を務め、学術集会長も経験されました。糖尿病と妊娠の領域では、日本の先頭を走ってこられた先生です。今日は、その歩みを振り返りながらお話を伺いたいと思います。

安日一郎 よろしくお願ひします。

伊藤 まず、産婦人科、なかでも産科を目指されたきっかけからお聞かせください。

安日 私が鹿児島大学の学生だった頃、鹿児島市立病院で五つ子が誕生し、大きなニュースになりました。もちろん、それだけで進路を決めたわけではありませんが、当時は周産期医療が学問としても臨床としても飛躍的に発展していた時代でした。その熱気の中で、産婦人科というより、産科をやりたいと思ったことをよく覚えています。

伊藤 私も同じ世代ですから、五つ子誕生が産科に与えたインパクトはよく分かります。そして先生は早い時期から、糖尿病合併妊娠や妊娠糖尿病に関心を持ってこられました。何か明確なきっかけがあったのでしょうか。

安日 研修医の頃、1型糖尿病を合併した妊婦さんが肩甲難産となり、分娩室で赤ちゃんが亡くな

るという出来事がありました。当時、血糖管理は主に内科が担当し、超音波検査もまだ未熟でした。胎児の推定体重も、現在よりはるかにいい加減でした。糖尿病合併妊娠で最も起こしてはいけないことが起きてしまった。その衝撃が、非常に大きかったです。

当時は、発育不全など「小さな赤ちゃん」が注目されていました。一方で、糖尿病に伴う巨大児や、その合併症にはあまり関心が向けられていませんでした。なぜこうなったのかと文献を調べてみると、糖尿病合併妊娠の管理は世界的にもまだ十分に確立されておらず、なぜ胎児死亡が起こるのか、どのように胎児の状態を評価するのかなど、分からないことがたくさんありました。

みんなが小さい赤ちゃんを研究しているのなら、自分は大きい赤ちゃんを調べてみようと思った。亡くなった赤ちゃんのことと、調べれば調べるほど未解明の問題が見えてきたことが、研究の出発点でした。

伊藤 私も先生と糖尿病学会に同行したことがあります。当時、この領域に取り組んでいる産婦人科医はまだ限られていて、こういう研究が始まっているのかと、とても新鮮に感じたことを覚えています。

先生は、その後ブラウン大学に留学されましたね。妊娠糖尿病研究の中心地で学びたいという思いがあったのでしょうか。

安日 研修医時代の後、妊娠糖尿病という疾患概念が大きなテーマになってきました。妊娠糖尿病には、妊娠中の周産期合併症と深く関わること、そして将来、母親が糖尿病になるリスクが高いことという、2つの大きな柱があります。当時の日本では、まだ診断基準をどうするかを議論